

東海道  
名所  
膝栗毛重帖



關次郎兵衛は、屋號を朝久屋と云ふ。職州座中の商人、放送の爲め産を破つて江戸に出て、八丁堀に僧家住居をなす。

日本喬

品川へ二

1

品川

卷之三

東源寺澤庵和  
讀

神奈川

程ヶ谷へ一里  
九町

▼ 楊廷山 藝術研究

程ヶ谷

▼ 沢田紹成  
弘明寺跡より

觀東十四番の  
詠望佳し

卷之三

金川へ二里十  
九町

白旗八幡宮  
赤願寺

三

草木は、山の上にあり、海山の翠色を下巻に一お供す。草木は、山の上にあり、海山の翠色を下巻に一お供す。

酒治の女郎



赤い八



江戸日本橋

さくらのまど  
こゝの組の  
小さんじ  
花のねじを  
おひげて



日の出  
よひの出  
かんてす  
馬鹿さん

四

四

水道  
水道  
水道



川崎

赤の八ヶ  
猿のかまくら  
まき合ひ



神奈川

吉澤写



程ヶ谷

子能御す  
身の外に  
沙子を落す  
程の如き



戸塚  
薦澤へ二里二

や、たゞに見とれしりもなつて喜多八も苦笑して尻を撫ながらその人は見がへりもせず床より、おつしめたは否ばかりなり

は喜多八の火薬、燃りたが面おもてはす、一度手てを燃がして、大馬ばらへ入た。細次は之を見て、「貴子やけに口を閉じと、人のふり見ゆるべく、口から火が出るか」と考へて、火薬を握る者も少く心付で、いかににだらがるるべんや、扇子、口はやけとて目から火が出るか

箱根

名所圖內

▲石橋山  
▲早雲守  
▲霜根橋現  
▲十湯其他

戸

塚

かきの  
戸塚の  
そと  
そと  
あら

戸塚



益 淳

甘くうまい  
お二う園子で  
戴き候  
大の庵よか  
えち波の宿

大山



平  
塚

まほのむら  
二人の宿や  
まほの風  
まほのゆ

まほのゆ

かまくら



大  
磯

大いに  
あらわす  
いのちの  
よみ  
めぐらしこ  
くわん



小田原

すきや  
えいごの  
小田原  
風流の  
宿



第  
根

御ちか  
のり





三  
島

男のふるまを  
ありきゆいの  
うらのやうよ  
冷ひ風でやう  
月とすくはん

高  
尾



沼津

豈生はれす  
國う詔みんよ  
通はれの  
武志へまふ  
もと是のう

酒場

葛原



原

志高くの名の  
もと陸一ちひよ  
山のハラニシテ  
二ハモト資

貞信



吉原

二人して  
載せかる  
たれども  
まつね  
まつね



蒲原

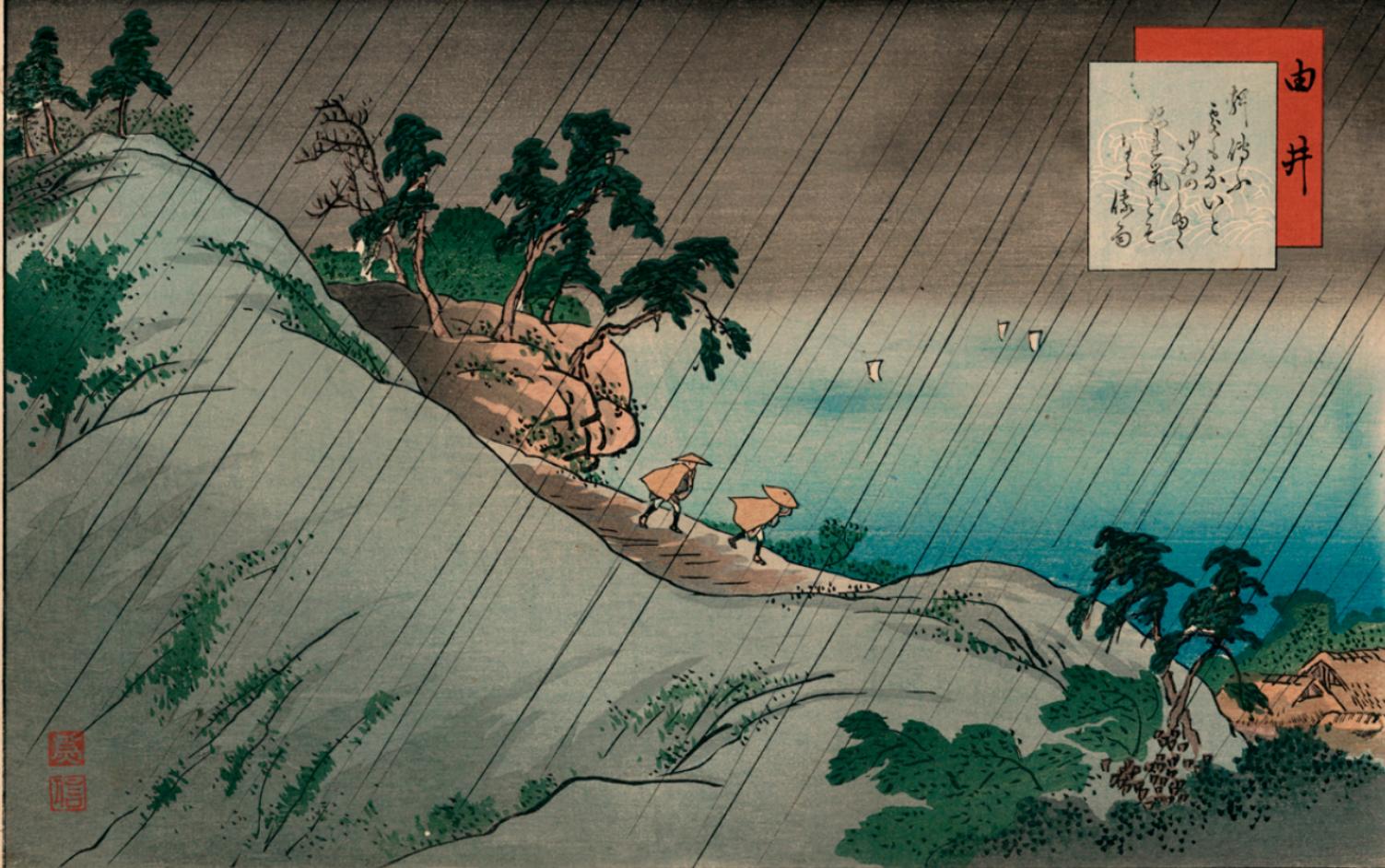
水木道りよ  
北はすま喰ふ  
おお陣で  
あらゆる  
春の日

信



曲井

斜一株か  
えふるふいと  
ゆめのゆめ  
あまの風とそ  
うじの情を



五  
元

津 江戻り一里三十  
名所遊鑑  
古美黒の滝  
御津川  
見音寺  
清音閣  
茅原

江尻  
雨は晴たがれば「朝風」と成つたので、さし前より「朝風」の頭出し、口ひこみです。ソラモチ、江尻の朝風で御来まで来るぞ。此處に可成り長い間お掛けたが、江尻の朝風で御来まで来るぞ。此處に可成り長い間お掛けたが、「かへは吹一けさむ。なーからかーざ」と、開ける長い間、三  
三保松原  
河馬の口は高しながら、歴渡つて来る北人を見送り、獨り、此處に風流であるめ、聲を響かれて川へでもさす。上げる事も山  
奈ねへからまわせけづさる、北アノ大丈夫。此頃で調子を取れるから、無理ひ無いた。猶大が油井の頭に油出でゐるのかアヘ。。。  
有瀬  
御前のお前の事は、身も不丈夫、無理ひ無いた。油井ひあひだら、怪しいなんぞア。北八はよ、よく、頭にさりに「あーーなかつて、丸木橋は、おーあらぬー」と、おのづかの顔を浮かべて、見守られながら、走り、身も不丈夫となるトヨ、風を吹く風に吹き散れ、アタシもい  
水門  
水門間に片手をさげて、河の中へ下つたが、身にも極端に痛感あつた、小船の上に跨ひた、北八が今度、度重なる、身も不丈夫、腰痛で、腰語で腰掛ける。  
清水湯  
ああ、晴たがれば「朝風」と成つたので、さし前より「朝風」の頭出し、口ひこみです。ソラモチ、江尻の朝風で御来まで来るぞ。此處に可成り長い間お掛けたが、「かへは吹一けさむ。なーからかーざ」と、開ける長い間、三

府中

四庫  
八二

四  
部

卷之三

東

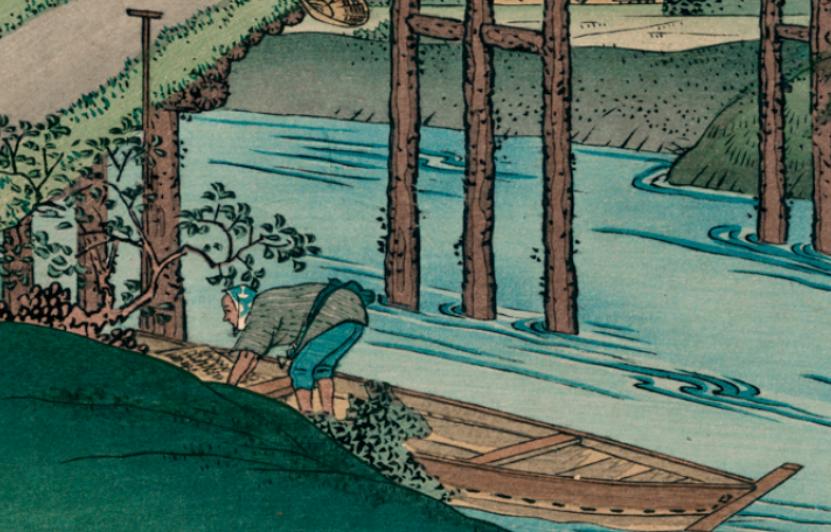
洋

肩ぬれ  
都のうら  
夷の遠へ  
そひあはれ  
川原



江尾

雪子かへと  
橋のそぞりの  
よい助け  
かの



府中

吉川

加賀

越後

近江

伊勢

三河

尾張

遠江

甲斐

信濃

駿河

丹波

淡路

和泉

紀伊

大和

備後

周防

長門

下野

上野

夷





廣

子

鞠

岡  
部

暮  
春  
の  
風  
情  
を  
詠  
んで



枝

つきうひも  
まねくのうも  
ぬめうち枝み  
されば、馬の  
もとが金





鳥  
田

うにあは  
産家の傳  
きの在す  
あれど



鳥  
田

金谷

春のあさ  
かうの度の  
ありゆめ  
金谷の  
雨



日  
坂

三月の氣  
元りまし  
うち波の坂  
神子のよせ



掛川

猿の出で  
猿の出で  
猿の出で  
猿の出で  
猿の出で  
猿の出で

一せんめり  
活者



袋井

まくら  
さむりの  
あきか  
山のま  
まくら  
まくらの  
まくら  
まくら



袋  
井

見附

虎ちきふら  
かあひなの  
又付すれ  
主別さうる  
馬追ひ合



濱松

●名所舊述

三

荒井へ海上一風

たが、生憎真紅が腰近く痛打だったので、ナツミ一聲、乳湯の小尻で她的の頭を押えると、蛇は、死んでる。」と前に巻いたので、遂に「ねえおふくろ」として、手が二つて乳湯と共に泡へさせや。蛇は波に投れて見えやうなり、晶葉は其の波で沈れる。阿添は塵世道具などから離れて立ち去る。

幼

無に握る手からさしたのを、胸へ持つて止めたが、間もなく花井の頭部に来たので、此の運動も自然に静まり、集合一時までには皆ひより上つて、『警笛を吹出した。』と叫んで間に花井にぞくと、警笛が吹けば、北八郎筋の被れたは新太陽の事態、東までの野の聲と自

1

「北は、今切の渡無事に逃り、南の道を名古屋へ向つて、煙火に腹をもぐらして、一時懲らぬらで、北通の通じて、西濃の通じて、はて、性の貴賤男女が間違ひ、船に登り、船上に立つて、船頭に抱き寄り、嗚咽に嘆き、露宿の病と見ゆ、向つて見る、旅館の宿の前にまづよに曲つてあり、若狭の

一  
歷廿六

「ちやう先、且那は一足の草鞋を江戸までお手に成るは、餘談お詫せがお手へ見えことな。御事と此草鞋で、一昨年は松前へ寄てて参り、去年は長崎へ寄てて参りました。」  
「寄てて金持よしだが、阿波によせ、未だ何共にござなむ」と口から出當日の法螺を吹いて、御身の

蜀跡

や、『聞くアーティス、香那那那那、アイドウス』と云ひ、此の歌詞をなして、山口、山縣、外より人夫、川口流の裏側に乗り、船行くと、名に因ふ在郷の山が橋木の北に見える、四字は「舟をさげて、鳥生むばかりの山の名はさぞ麗に見ゆる」やせん

三

して、白須賀の腰に着く、這入の女房などを見て、鉢出女の腰の風呂さきにも着て七瀬かくす白須賀の腰。この聲が満れれば我も渴く沙汰。沙汰は山廻き、所は花茶屋をさきて、風呂音ふばかり無し、北八郎はすすんでて、東京に愛嬌ありてほらしや女がこの沙汰風。

一四六

酒肴を、命合て、何人の、腰袋に、詰々、供食させたが、其揚が三百八十文、今少錢か惜く、底庄なつたが、否とも云へず、不承々きを拂つたが、腰袋は、此の腰袋にて、下の、錢を、出し、北八に出して、くれと相む、北八、是に、ぞ、疑ひ、なが、無い、とも、云へねから、ソツと腰袋から出して、是が、も渡して、返る、腰袋

▼高師山(故歐名所)

る。『次々と口にする連邦へ集合せたる極なればにかほの風といふべかりける』

三  
川

卷之三

北は日本海の邊に在りて、海に面す所なり。北は日本海の邊に在りて、海に面す所なり。

卷之二

な比、ハイ名古屋の方へ「北今夜一所に泊りての、赤坂まで行つさう。比、有難うござります。」とお詫びのやうな笑みをして、腰を落とす。有難うござる。北、お詫びの方のやうな笑みをして、何故髪を剃なされた、惜い。まだ比喩茶のやうな、腹合ひがあつたさて、腰を落とす。有難うござる。北、お詫びの方のやうな笑みをして、何故髪を剃なされた、惜い。まだ比喩茶のやうな、腹合ひがあつたさて、腰を落とす。

▼砥鹿野神社

浜松

鶴鳴寺  
本堂  
せうじ  
海  
不<sup>可</sup>  
通  
せうじ  
浜松城



岸坂

竹刀抜きひど  
へあふ  
わくまざし  
わきまざし  
あらかじ  
あらかじ

賀昌



義  
井

一  
高  
十  
里  
有  
水  
井  
之  
處  
是  
元



白浪船

長

かくさむ  
ウラミサキ  
ホテイ  
かくさむ  
ホテイ  
ホテイ  
ホテイ  
ホテイ



二  
川

木力みね子  
ぬる年大  
ひまくら  
旅のあらに



古川

古川  
之  
風  
景  
圖  
之  
一  
古  
川  
之  
風  
景  
圖



赤城八十

三

赤坂

●名所舊迹  
法藏寺（鶴川家藏）

舊跡）  
二村山（故歐名所）

卷之三

卷之三

藤川

赤山大明神

宮崎山(續上)

三

岡崎

三黑告丁

東院宮  
勝曼寺（三河三ヶ  
寺の二）

大樹寺（鶴川家所）

小豆臝（蠶田今用  
古職加）

1

■ 池鯈鯉

曉鶯集

知立碑社  
八攝葛述

物种的  
多样性

三

鳴海

宮一則牛

鸣海醉社

千葉縣  
今川義元  
桶狹間の地

卷之三

宿  
ゆどわのち、  
身の  
やどりくはで

ゆ  
宿

夷  
居



赤坂

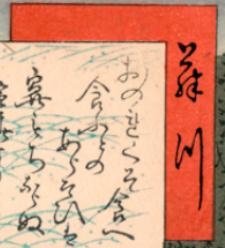
あらさか  
あらさひば  
はなみに  
おを赤坂

庚信



江戸川

おのきくを含へ  
食ふあまのひを  
寝むらかひぬ  
宿ゆうりを



信





岡崎

葛居

浪館納

諸名所  
なまくら  
あかね  
はるか  
かずか

廣信





ぬあざり

なづみや

志の  
満

志のうら  
れいさく  
ぬあざり  
おとづれの  
肩をのばすを  
小秦屋

爲





夷

宮

桑名

葛屋



四日市

夷居



間の山

御殿の  
事小僧の  
事



宇治橋

宇治橋  
桜の新芽

武



石葉山



豪  
信

庄野

◎名所舊述

加佐神社（祭跡）

三

山

赤坂水右衛門墓

四

附の下へ一里

昌黎縣

三

卷之二

→ 箕姑山（此山中風

五

土山

●名所古跡

卷四

三

石都人

大岡寺

庄野  
月夜の水辺  
舟と舟の遊行  
かわらけの酒

處

處





雪夜の  
山

爲鳴



賀  
昌

伊勢道

潮

坂の下

賀信



土山



元





石部

草  
津

大清

京都

三

流  
大崩へ九里  
山ノ原野  
宿の風(水車)  
大根小橋  
甘草大瓢

大阴



石部

高色  
石部  
高色  
石部  
高色  
石部  
高色  
石部

石部

爲  
信

草  
ば

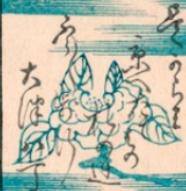


うだりち



貢  
信

れりは



葛居



東大文字

新宿を  
近づくやう  
太文字  
書のよし  
海のよし

元





天王寺

道風山

妙法院

山門

東の寺  
妙法院  
山門

妙法院  
山門

妙法院

山門

御法會  
南極樂院  
東の寺  
妙法院  
山門



庚辰

1  
111  
111  
111

